



Title	植民地インドの教科書における過去の表象：ムハンマド・イクバル&ラーラー・ラーム・プラシャード『インド史』（1913 年）を読む
Author(s)	宮本，隆史
Citation	外国語教育のフロンティア．2022， 5， p. 315-329
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87586
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

植民地インドの教科書における過去の表象：
ムハンマド・イクバル&ラーラー・ラーム・プラシャード
『インド史』（1913年）を読む

Representations of India's Past in Muhammad Iqbal and
Lalah Ram Prashad's *Tārīkh-e Hind* (1913)

宮本 隆史

Abstract

This paper examines the structure and content of the history textbook, *Tārīkh-e Hind* (1913), written in Urdu by Muḥammad Iqbāl and Lālāh Rām Prashād. Under the regulation of the colonial provincial government's textbook committee and the epistemological framework of colonial knowledge, the authors sought their own discursive strategies. Simply read, the historical narratives they wrote were reminiscent of the standard narratives of colonial bureaucratic intellectuals. Iqbal and Prashad divided India's past into three main periods: the ancient Hindu period, the medieval Muslim period, and the modern British period. This framework of writing Indian history, dividing it into three periods, had been used by British historians such as James Mill and H.H. Wilson. Also, the geographical framework of the authors' historical narrative was clearly based on the British Indian territory. As such, the historical narrative of *Tārīkh-e Hind* appears to be a derivative of colonial discourse. However, one can identify the authors' own strategies in the narrative details, that is, a strong emphasis on the distinction between Hindu and Muslim pasts. Not only the ancient Hindu past, but also the Maratha past was written as an independent chapter. The glorious story of the Marathas, in which Shivaji played a central role, was told in Iqbal's voice, not Tilak's. In addition, Sanskrit and Muslim cultures were portrayed in stark contrast, emphasizing the latter's connection to traditions of the Arab and Persian world, outside the Indian subcontinent. Thus, while taking a pro-British stance, the text juxtaposed the Hindu and Muslim pasts. In doing so, it prepared a narrative of a de-territorialized Islamic community, and the story of Shivaji's Hindu kingdom was useful in portraying the past of the other.

キーワード：歴史叙述、教科書、英領インド、ムハンマド・イクバル

1. はじめに

本稿の目的は、ムハンマド・イクバル (Muḥammad Iqbāl) とラーラー・ラーム・プ

ラシャード (Lālah Rām Prashād) によって、ウルドゥー語で書かれた中等科の歴史教科書『インド史 (Tārīkh-e Hind)』(1913)¹⁾に注目し、当時の歴史的文脈の中でテキストの内容を読解することにある。これは、植民地インドにおいてウルドゥー語散文で書かれた歴史叙述として、史学史・ウルドゥー文学史・教育史の上で興味深い資料である。また、独立後のパーキスタンにおいて、「建国詩人」とされたイクバルの思想を歴史的文脈に位置づけるうえでも興味深い。さらに、この教科書の叙述様式が1950年代まではパーキスタンの歴史教科書のひながたとなったと指摘されており (Qasmi 2016: 237)、その内容を確認しておくことは独立後の教材の歴史を理解するうえでも重要である。

『インド史』については、ハーシミーが文献学的に考察し読者の反応についても論じているほか (Hāshmi 1982: 433-439, Hāshmi 2004: 155-172)、カースミーがパンジャープの教科書についての歴史研究の中で論じている (Qasmi 2016: 237-239)。しかし両者とも本書の内容の詳細な検討はしておらず、テキストの構造と叙述に関して考察を深める余地がある。

以下では、2節で『インド史』の置かれた歴史的文脈を整理し、ウルドゥー語の歴史叙述についての史学史的な流れと、植民地の教育と教科書を取りまく制度を確認する。続く3節で『インド史』の読解を行なう。著者に関する基本的情報を確認したうえで、テキストの構造とその特徴を読み解く。最後の4節で議論のまとめと今後の課題を提示する。

2. テキストの文脈

2.1 植民地支配とウルドゥー語の歴史叙述

英領インドのイギリス人官僚知識人たちは、インドに歴史叙述の伝統を見出さなかった。古来インドには、「事実」にもとづかない神話はあっても、歴史を書く伝統が存在しないとされたのである。最初の歴史叙述の伝統は、イスラーム勢力による「外来の」年代記であるとされた。そうしたインドに、より近代的な学知としての歴史をもたらしのが、イギリス支配であると主張したのである (Aquil and Chatterjee eds. 2008: 1-2)。つまり、歴史叙述とはインド人の過去に関する感性を「文明化」するための技術として位置づけられた²⁾。

ジェイムズ・ミルの『英領インド史』(Mill 1817) は、インド史の植民地化を代表する著作のひとつで、植民地官僚の教科書として使われつづけた。こうした植民地主義的なインド史の叙述には、西洋の歴史概念が強く反映され、典型的には過去を古代／中世／近代に分ける時代区分として表れた。インドの過去は、ヒンドゥー時代 (古代)／ムスリム時代 (中世)／イギリス時代 (近代) と区分されることが一般的になったのである。この時代区分は、古代のヒンドゥーの黄金期が、ムスリムの侵入によって終焉して暗黒期に入り、そのムスリム支配者の圧制からインドを救い出すのがイギリス統治であるという、植民地支配の正当化に都合の良い物語の枠組みを提供するものであった (井坂 2019: 99-100)。

こうした歴史叙述の枠組みは非常に強力で、インドの知識人たちが自分たちの言語で歴史を描こうとする際に、大きな影響を与えることになった。たとえばラナジット・グハは、インドの知識人たちが植民地主義の歴史叙述の枠組みと格闘することを経て、ナショナルイズムの物語としての歴史叙述を生み出していった過程を論じている (Guha 1988)。19世紀のインドの知識人たちは、植民地主義の知の枠組みの影響を強く受けながら、歴史叙述を自分たちのアイデンティティを模索する試みと重ね合わせ、在地の歴史全般を新たに様々な角度から見直したのであった (井坂 2019: 99)。

ジャーヴェード・アリー・ハーンは、19世紀を通じてウルドゥー語による歴史叙述が、イギリス植民地政庁と知識人たちとの関わりのなかで書かれるようになっていったことを示している。彼によれば、現存する最初のウルドゥー語で書かれた歴史叙述は、サイイド・ルスタム・アリー・ビジノーリー (Saiyid Rustam ‘Alī Bijnorī) という人物によってヒジュラ暦 1188 年 (西暦 1774/75 年) に書かれた『ローヘーラの物語と諸事情 (*Qisṣah o Ahvāl-e Rohelah*)』という書であったとされる。これは、イギリス東インド会社の将校の依頼で書かれたもので、ローヘルカンド (Rohelkhand) を支配したアリー・ムハンマド・ハーン (‘Alī Muḥammad Khān, 1714-1748) に関する叙述であったという (Khan 2005: 76-80)。一般的に、ウルドゥー語の近代的な散文体が確立するのは、19世紀半ばになってからのこととされるが、この間にもウルドゥー語による歴史叙述の試みは重ねられていた。ウルドゥー語の近代的散文体の確立と歴史叙述の試みは同時進行で進んでいたと見ることができる。また、初期のウルドゥー語による歴史がフォート・ウィリアム・カレッジにおいて書かれたことに見られるように、ウルドゥー語の歴史叙述の形成は教育と大きく関わっていた。

2.2 植民地期パンジャープの教育制度

イギリス東インド会社がインドの住民の教育に積極的に携わるようになるのは、1813年の特許状更新を機に住民の教育が会社の責務として位置付けられるようになってからである (Viswanathan 1998: 23-24)。この特許状法によって、年間 10 万ルピーを教育と学問に当てることが定められた。これを受けて、サンスクリット語とペルシア・アラビア語を重視する「オリエンタリスト」と英語教育を重視する「アングリシスト」の対立がおこった。この論争は、1835年のマコーリ (T.B. Macaulay) の教育に関する覚書によって終止符が打たれ、後者の主張が植民地政庁の教育に関する基本路線とされた。1854年には、東インド会社の監督局総裁チャールズ・ウッド (Charles Wood) が教育に関する通達を出し、高等教育における英語の重視の方針を確認するとともに、初等教育における現地語の使用を促し、大衆教育の重要性を強調した³⁾。しかし、エリート教育が発展した一方で、大衆教育の普及はこれ以降も限定的なものにとどまった (井坂 2019: 76)。

しかしそれでも、ウッ드의通達以降に、州ごとの教育政策が進められ、各州の教育局 (Education Department) の下に教科書委員会 (Text-book Committee) が設立されるようになった。これら委員会の役割は、教材となる書籍や地図に関する助言やその制作を行なうことであった。多くの場合、教科書委員会は教材の作成に直接は携わず、民間の出版社と契約を結んだ。こうした出版社としては、北西州ではナワルキショール・プレス (Navalkishor Press) が有名であり、本稿で注目する 20 世紀初頭のパンジャープではグラープ・スィン・アンド・サンズ (Gulāb Singh and Sons) が繰り返し契約を更新している (*Report on the Progress of Education in the Punjab for 1911-12*)。これら出版社は、地元の知識人に教科書や教材の執筆、英語で書かれた教材の現地語訳などを依頼した。

20 世紀初頭のパンジャープでは、州の教育局が定めるカリキュラムと指針をもとに、教科書委員会が制作された教材を検定し、教科書や学校図書室蔵書として推薦することとされた (*Ibid.*: 55)。地方支部委員会も設置することがあり、1908 年に設置されたデリー支部委員会は、「デリーの学者たちが扱いに特に優れている」とされたウルドゥー語の教材制作において重視されていた (*Ibid.*: 54-55)⁴⁾。1911 年度のパンジャープ教科書委員会は、ヨーロッパ人 6 名、ヒンドゥー 6 名、ムスリム 6 名、シーク 3 名で構成されており、信仰別に構成員数のバランスがとられていた。このことは、宗派集団に関する配慮を教材の執筆者に促す誘因になった可能性がある。1906 年度から 19011 年度のあいだに 2,258 の教材が検定され、そのうち 351 冊が教科書として推薦され、316 冊が学校図書室の蔵書として推薦されている。多くの著作が「正確性の不備、印刷と製本の粗悪さ、高すぎる価格、他の出版社や著者の権利侵害」(*Ibid.*: 55) などの理由で非推薦とされている。

また、英語教材が順調に増えていたのに対して、現地語教材の点数の伸び悩みが課題とされた。パンジャープ州における現地語教科書の改善のために、1905-08 年に教科書改訂委員会が設置された。その成果として、初等科向けのウルドゥー語とパンジャービー語の教材シリーズや、中等科のためのアラビア語とサンスクリット語の教材群が出版された。また、この時期には数学、地理、公衆衛生などに関する英語の書籍が、さかんにウルドゥー語に翻訳されていた。この傾向は教科書改訂委員会の解散後も続いた (*Ibid.*: 55)。

また、現地語教材の執筆の促進に、教科書委員会は州政府の補助金 2,500 ルピーに加えて 1,000 ルピーを充て、これをもとにコンペティションを行っていた。1910-1912 年のあいだに、合計 46 の賞が授与され、受賞者は 100 ～ 400 ルピーの賞金を受け取った。1912 年には 41 作品の応募があり、ウルドゥー語著者 7 名に合計 1,500 ルピー、ヒンディー語著者 7 名に合計 1,400 ルピー、パンジャービー語著者 3 名に合計 600 ルピーが授与された (*Ibid.*: 57)。こうした賞金は、知識人たちにとって、教材執筆の誘因となったであろう。

3. イクバルとプラシャードの『インド史』の読解

イクバルとプラシャードが『インド史』を出したのは、上記のような文脈においてであった。以下ではまずふたりの著者にとっての教科書執筆の同時代的意味を抑えた上で、『インド史』の内容の確認を行なう。

3.1 著者について

ムハンマド・イクバルは、近代インドを代表する詩人・思想家として「大学者（アッラーマ）」と呼ばれ、1930年の全インド・ムスリム連盟のイラーハーバード（Ilāhābād/Allahabad）大会でのムスリム国家構想を提示したことによりパーキスターンの「建国詩人」と位置づけられることになる人物である。彼は、1899年にラーホールのパンジャープ大学で修士号を取得し教鞭をとったのち、1905年にロンドンにわたり続いてミュンヘン大学で博士号を取得し、さらにロンドンで弁護士資格を得たうえで1908年に帰国した。イクバルは留学以前にはインドへの祖国愛を強調しヒンドゥー教徒との協調路線を唱えており、そうした思想から詩作を行なって注目を集めていた⁵⁾。留学中にニーチェやベルクソンなどの思想家の影響を受けた彼は、領土的ナショナリズムと決別し、国家単位の民族性を強調する立場から、国境を越えたイスラーム共同体の連帯を唱えるようになる⁶⁾。彼が『インド史』の執筆にかかわったのは、思想的変化をとげて帰国した後であった。帰国後のイクバルは、ラーホールのガヴァメント・カレッジ（Government College）で教鞭を取るが、弁護士業に専念するため辞職する。松村が示すように、弁護士業の傍ら、歴史（1913年）、ウルドゥー語（1925年）、ペルシア語（1927年）の教科書の執筆者となっている⁷⁾。これは、イクバルの教育に対する関心の表れ（松村 1983: 122）であったと同時に、弁護士業で大きな成功を収められなかったイクバルの収入源として重要であったとも指摘される（Hāshmī 2010: 408）⁸⁾。

ラーラー・ラーム・プラシャードは、ラーホールのガヴァメント・カレッジの歴史学教授であった。1864年創立のガヴァメント・カレッジは、イクバルも学生時代を過ごした名門校である⁹⁾。19世紀後半のイギリス植民地政庁は、中央アジアを舞台としていわゆる「グレート・ゲーム」と呼ばれるロシアとの覇権争いを展開しており、パンジャープを前哨地帯と位置づけて親英知識人層を生み出そうとした（山根 2019: 153）。そのために設置された研究・教育機関のひとつがガヴァメント・カレッジであった。パンジャープの知識人ネットワークの中にいたプラシャードが、著名なイクバルに共著をもちかけた可能性がある。

ハーシミーは、本書の執筆を実際に行なったのはプラシャードであり、イクバルは出版前に目を通し同意できない部分について削除を求めた程度の関わりだったろうと主張している（Hāshmī 1982: 434-439）。この主張を受けてカースミーは、教科書委員会にイク

バールが制約されていたのは確かであるが、叙述の中で彼の文学的な表現力は発揮されているとし、西欧的近代性に対抗するための「力への意志」をイスラーム共同体に与えるテキストとして読んでいる (Qasmi 2016: 239)。

3.2 テキストの構成と内容

『インド史』は、本編7章、ふたつの補論、ふたつの補遺からなる。

第1章「ヒンドゥー教徒の時代」(Iqbāl and Prashād 1913: 1-62)では、最初の第1節として「ヒンドの国 (mulk-e hind)」つまりインドの地理的な説明が置かれている。この節では、インド亜大陸の山脈、高原、海岸線といった自然地理的叙述がなされる。ビルマやバローチスターンと並べて、行政上は英領インドの一部ではなかったランカー島（スリランカ）についても述べられている。歴史的な叙述は第2節から始まる。まず、「アーリヤーのヒンドゥー (āryā hindū)」によるインド「征服」から語り始められる。インド亜大陸に侵攻したアーリヤー人たちが戦争にいそしむ中で、儀礼を司る集団として司祭階級のブラフマンの社会集団が生まれたとしている。ここでは、神話的な説明は見られず、政治的・社会的な要因によって社会集団が生まれたと叙述している。第3節では『マヌ法典』において、ブラフマン、クシャトリヤ、ヴァイシヤ、スードラ（シュードラ）というザート (zāt) の区分が明確にされたとしている。いわゆるカーストと結び付けられて考えられるヴァルナ（四姓）についての記述であるが、ザート（ジャーティ）の語が使われている。第4節は、ブッダと仏教についての叙述である。ブッダの人と思想について簡潔にまとめたうえで、王たちの庇護によって仏教が栄えていくことが語られる。第5節では、イラン人とギリシャ人によるインドへの侵攻について語られる。アケメネス朝のダレイオス1世、マケドニアのアレクサンドロス、セレウコス朝のセレウコス1世、バクトリア王国などのインドへの侵攻について叙述し、「古代のヒンドゥー教徒」とギリシャ人の文化的・技術的な交流について述べている。第6節は、仏教の興隆と衰退についてである。マウリヤ朝のチャンドラグプタ (Candragupta) とアショーカ (Ashoka) の治世、仏教の衰退、ジャイナ教の登場が簡潔に言及される。節後半では、アーリヤー人、ヒンドゥーのザート、ヒンドゥーの宗教などについて語る。第7節では、プラーナ文献について述べ、ヴィシュヌとシヴァの信仰の興隆、ラージプート、ベンガル、デカンの王権に言及する。

第2章「イスラーム王朝の初期の時代」(Ibid.: 62-107)では、ムガル期に入るまでの北インドにおけるイスラーム政治勢力について叙述している。第1節は、イスラーム勢力のヒンドゥスターンへの侵攻を叙述し、これによって北インドの多くの人びとが徐々にイスラームへ改宗したとする。進攻の経緯として、サーマーン朝の興隆から語りおこし、ガズナ朝のアルプテギーン (Alptegīn)、スブクテギーン (Subktegīn) に連なる流れが説明され、ガズナ朝のマフムード (Maḥmūd) の北インド攻略から王朝衰退までが述べられる。第2

節はデリー・サルタナットの叙述にあてられ、奴隸王朝、ハルジー朝、トゥグルク朝、サイイド朝およびローディー朝の4つの項目に分けられている。デリー・サルタナットは、ローディー朝がアフガン系である以外は、トルコ系の王朝であったが、ここではすべてアフガンの王朝とされている。奴隸王朝の項目の前半はゴール朝の説明にあてられ、後半で奴隸王朝の主要人物を中心に叙述が展開する。続くハルジー朝の記述では、アラウッディーン・ハルジー (‘Alā al-Dīn Khaljī) によってデカンがはじめてムスリムの支配下に入れられたことが強調される。アラウッディーンの死後、帝位が頻繁に入れ替わったことが、王妃デーヴァル・デーヴィー (Deval Devī) の物語として語られ、これはアミール・フスラウ (Amīr Khusraw) のマスナヴィーに描かれていることが特に説明される。次のトゥグルク朝の記述は非常に簡単に済まされており、半分以上はティームール (Tīmūr) とその北インドへの侵入についての記述に割かれている。つぎの項では、ティームールが去った後に一時的にデリーをダウラト・ハーン (Daulat Khān) が支配したことを述べ、サイイド朝とローディー朝の盛衰をそれぞれわずか1ページでまとめている。第3節では、デリー・サルタナットと同時代の諸王朝について簡単にまとめている。デカンのバフマニー朝とその後継のいわゆるムスリム五王国の盛衰、南インドのヴィジャヤナガル王国の記述はわずか半ページほど、そしてベンガル・スルターン朝の興亡が描かれる。最後に、ジャウンプル (Jaunpur)、グジャラート (Gujarāt)、マールワ (Mālwa) のイスラーム王朝についてごく簡単に言及している。

第3章「イスラーム王朝の第二の時代－ムガル帝国の様子」(*Ibid.*: 108-159) は、皇帝を中心とした紀伝的な形式で書かれている。第1節は、初代皇帝バーブル (Bābur) の治世を描いている。最初に、ティームールに由来するバーブルの系統を確認する伝記的記述を置いている。重病になった息子のフマーユーンに代わって、自らの死を望む儀式を行なって死んだとする伝説を示したうえで、敵には無慈悲である一方、勇敢で忍耐強く希望に満ちた人物であったと評している。節の最後には、ムガル皇帝たちにいたるティームール家の家系図が置かれる。第2節は、フマーユーン (Humāyūn) の治世である。バーブルから帝位を継いだあとに、グジャラートを獲得したが、シェール・シャー (Sher Shāh) との戦いに敗れ亡命生活に入る。シェール・シャーが建てたスール朝の治世を述べた後、彼の死後にフマーユーンが失地を奪回するものの、突然の事故死にいたる流れが描かれる。第3節はアクバル (Akbar) の治世についてで、約15ページの厚い記述である。彼の幼少期の記述からはじまり、重心バイラム・ハーン (Bairam Khān) の功績、スール朝の武将ヘーム (Hemū) の進撃から第二次パーニーパットの戦いへつながる流れが記述される。さらに、バイラム・ハーンの失脚と死、アクバルの実権確立と征服戦争、ラージプートとの同盟の樹立、ベンガル征服、そしてチャーンド・ビービー (Cānd Bībī) が守るアフマドナガル (Aḥmadnagar) 攻防戦が記述される。アクバルの晩年については、対立した皇太

子サリーム (Salīm: 後のジャハーンギール) を後継者と決定したうえで死を迎えたと描かれる。続けて、アクバルの気質、信仰、帝国行政、財政、統治の様子などが記述され、その業績が好意的に描かれている。第4節では、ジャハーンギール (Jahāngīr)、シャージャハーン (Shāh Jahān)、アウラングゼーブ (Aurangzeb) の3人の皇帝の治世を描いている。アクバルを継いだジャハーンギールの治世は¹⁰⁾、妃のヌール・ジャハーン (Nūr Jahān) について、イギリスからのトマス・ロウ (Thomas Roe) の使節について、そして後継争いが比較的詳細に描かれる。次に、この争いを制したシャージャハーンの治世については、ハーン・ジャハーン・ローディー (Khān Jahān Lodī) の反乱、デカンのアフマドナガル王国とビージャープル王国との戦い、シャージャハーンの建てさせた壮大な建造物について述べる。そのうえで、シャージャハーンは、善良で公正な皇帝であり、良い統治が行なわれ平和が実現したと評している。続くアウラングゼーブの記述は、皇位継承の争いの記述、武将ミール・ジュムラー (Mīr Jumlā) の功績、マラータ、ビージャープル、ゴールコンダとの戦い、ラージプートの反乱鎮圧など戦いに明け暮れたこと、皇子との不和、イギリスとフランスの勢力がインドで拡大しつつあったことが述べられる。それに続けて、およそ2ページにわたるアクバルとアウラングゼーブの比較がなされ、アウラングゼーブ治世の財政悪化と、信仰上の厳格さから非ムスリムの敵対心を強めることになったことが語られる。第5節は、ムガル帝国の衰退と没落についてである。アウラングゼーブの後継者たちについて述べたうえで、マラータやスィクなどの勢力の台頭、そしてジョードプル、デカン、アワド、ベンガルなどが台頭したことが述べられる。さらに、ナーディル・シャー (Nādir Shāh) による侵攻、アフマド・シャー・ドゥッラーニー (Aḥmad Shāh Durrānī) の侵攻、シャー・アーラム2世 (Shāh ‘Ālam ṭhānī) のブクサル戦いの戦い (1765) でのイギリスへの大敗、グラーム・カーディル (Ghulām Qādir) によるデリー略奪といったムガル帝国の衰退を示す事件について述べ、最後の皇帝たちの苦境と帝国の解体を描く。章の最後には、再びアクバルに言及し、その寛容政策によって帝国がいかに良く統治されたかを述べている。

第4章「マラータの時代」(Ibid.: 160-189) では、第1節でシヴァージー (Shivājī) とマラータ勢力の紹介をする。節の冒頭では、簡潔ながらマハーラーシュトラ (Mahārāshtra) の地理的な説明がなされており、読者に地理的知識がなく特記する必要があると著者たちが考慮したように見受けられる。アクバルからアウラングゼーブの治世にかけて、マラータの民の一部はムガルに、その他はアフマドナガルやビージャープルに臣従していたことが述べられる。そのうえで、シヴァージーの台頭、ビージャープルとの対立とその将軍アフザル・ハーン (Afzal Khān) の謀殺、アウラングゼーブとシヴァージーの対立、シヴァージーの戴冠、そしてその死が記述される。節の末尾には、シヴァージーを祖とする家系図が提示されている。前章のムガル帝国の叙述と同様の形式になっている。第2節では、マ

ラータ王国の盛衰が描かれる。シヴァージーの後を継いだサンバージー (Sambhājī)、その子のシャーフー (Shāhū)、その下で実権を握った宰相バーラージー・ヴィシュワナート (Bālājī Vishwanāth)、二代目宰相バージー・ラーオ (Bājī Ra'o) について語ったうえで、マラータ同盟の諸勢力について整理する。ヴィシュワナートの項では、宰相の家系図が示されている。続けて、王国の全権を掌握した三代目宰相バーラージー・バージー・ラーオ (Bālājī Bājī Ra'o) の時代に移り、ハイダラーバードのニザーム国との戦い、アフマド・シャー・ドゥッラーニーとの第三次パーニーパットの戦いにおける敗北を叙述する。次に四代目宰相マードヴ・ラーオ (Mādhav Ra'o)、法官として名高いラーム・シャーストリー (Rām Shāstrī)、マラータ同盟のホールカル家の女性当主アヒリヤー・バーイー (Ahiliyā Bā'ī) について述べる。五代目宰相ナーラーヤン・ラーオ (Nārāyan Ra'o) の暗殺後の混乱の経緯を述べたうえで、第一次マラータ戦争から講和までの叙述がなされる。続けて、ハイダラーバードのニザーム国に圧勝したカルダーの戦いの叙述が置かれる。1795年のマードヴ・ラーオ・ナーラーヤン (Mādhav Ra'o Nārāyan) の死、最後の宰相バージー・ラーオ2世 (Bājī Ra'o II) の即位、彼とマラータ諸勢力との関係悪化、バセイン条約から第二次マラータ戦争へと至る流れが詳細に描かれ、最終的にイギリスの勝利に終わったと結ばれる。

第5章「ヨーロッパ人の初期の遠征」(*Ibid.*: 190-204) では、まずヨーロッパの勢力が交易のためにインドに進出をはじめたことを述べる。そして、ポルトガル人による航路の発見、アルブケルケの来航、ポルトガルの商業拠点の設置、非キリスト教徒への迫害などを語る。続けて、オランダ人のインド来航と交易の拡大、イギリス人の来航と居留地の発展、フランス人の来航と居留地、そしてヨーロッパ諸国の東インド会社の設立について述べている。この章は非常に短く、次章への導入といった位置づけになっている。

第6章「イギリス人の初期の統治」(*Ibid.*: 205-237) では、ロバート・クライヴ (Robert Clive) の時代を中心にベンガルの政治的な展開を叙述している。第1節は、イギリスとフランスの東インド会社どうしが戦ったカーナティック戦争 (1744-1761) についての記述である。デュプレクス (François Dupleix) とクライヴの戦闘を描き、ヴァンディヴァーシュの戦いにおけるイギリス側の勝利で戦争が終結する経緯を述べる。第2節は、クライヴのプラッシーの戦い (1757) での勝利までを記述している。ムガル帝国から事実上独立したベンガル太守国の台頭、アリー・ワルディー・ハーン (Alī Wardī Khān) の治世、次の太守シュジャーウッダウラ (Shujā' al-Daulah) の即位 (1757) と同年のいわゆるブラックホール事件、クライヴによる反撃、シュジャーウッダウラに対するミール・ジャアファル (Mīr Ja'afar) らの陰謀、そしてプラッシーの戦いの顛末が描かれる。第3節は、クライヴによる統治と東インド会社へのムガル皇帝からのディーワーニー (司法徴税権) の付与が記述される。ミール・ジャアファルのベンガル太守即位と退位、ミール・カースィム (Mīr

Qāsim) の太守即位とブクサルの戦い (1764)、ムガル皇帝からの東インド会社へのディーワーニーの付与 (1765)、そして帰国後に議会でなされたクライヴの弾劾までを描く。

第7章「インドのイギリスの帝国」(*Ibid.*: 238-378) は、補論と補遺を除いた本文378ページ中の140ページにもわたる長大なもので、いかにイギリスの統治時代が重視されているかがわかる。この章は、歴代の総督の業績を年代順に並べたものになっている。第1節はウォレン・ヘイスティングズ (Warren Hastings) の初代ベンガル総督としての統治、第2節はコーンウォリス (Cornwallis) の下での第3次マイソール戦争とベンガルの統治制度の確立、第3節はウェルズリー (Wellesley) の下での第4次マイソール戦争勝利と第2次マラータ戦争、第4節はコーンウォリスの2度目の統治からミントー (1st Earl of Minto) の統治まで、第5節はヘイスティングズ (Francis Rawdon-Hastings) の下でのグルカ戦争とピンダーリー戦争、第6節はアマースト (Amherst) の下での第1次英緬戦争とバラットプルの包囲戦、第7節はベントインク (Bentinck) の下での改革、第8節はオークランド (Auckland) の下での第1次アフガン戦争、第9節はエレンボロー (Ellenborough) の下でのカーブル遠征およびスインド併合とグワーリヤル遠征、第10節はハーディング (Hardinge) の下での第1次シク戦争、第11節はダルハウジー (Dalhousie) の下での領土拡大 (第2次シク戦争によるパンジャブ併合、第2次ビルマ戦争でのペゲー獲得、ナグプルやアワドなど藩王国の併合) と植民地基盤の強化、第12節はキャンニング (Canning) の時期の大反乱の経緯とその鎮圧という流れで記述がなされる。第13節では、大反乱鎮圧後の1858-62年のキャンニングの下での財政と行政の改革について述べたうえで、カーゾン (Curzon) までの歴代の総督について駆け足で記述し、最後にミントー (4th Earl of Minto) が1905年にボンベイに到着したという記述で終わる。この章の末尾には、「ヒンドゥースターンの過去と現在の状態」と題された節が置かれ、いかにイギリスの統治がインドに平和をもたらし、住民の生命と財産の権利を保護し、諸制度を導入することで国を発展させてきたかを強調する。さらに、イギリス人はムガルたちと同様に「外国の住人」であるにもかかわらず、インドの人びとを雇用した点で非常に寛大だと述べる。それに対し、アクバルを例外としてムガル皇帝たちは、ヒンドゥーやヒンドゥースターンのムスリムを登用しなかったと記す (*Ibid.*: 376)。かつての皇帝たちは人民が困窮したときに何もしなかったが、イギリスの統治の下では病院や救貧院が設置され貧しき者にも手が差し伸べられると述べる (*Ibid.*: 377)。イギリス統治がいかにインドの人びとの幸福に配慮するものであるかを説いて本論を閉じている。

本論のあとには補論と補遺がおかれる。補論1「古代および現代の国の区分と著名な歴史的場所」(*Ibid.*: 379-416) では、英領インドの各州と藩王国領に関する記述を行なったうえで、「ヒンドゥー時代」と「ムスリム時代」の地名の中で歴史的に見て有名なもの (ジャールカンド、ローハールカンド、ブンデルカンド、ドーアーブなど) について説明してい

る。補論2「1906年のインドの現状」(*Ibid.*: 417-441)では、人種(nasli)と言語、宗教、教育、森林、鉱物、工業と手工業、商業、鉄道、統治機構、総督参事会という項目が立てられ、末尾には地方行政と自治に関する記述がなされている。インドの行政官僚たちによって書かれた地誌にも似た様式で書かれている。補遺1「サンスクリットの文学」(*Ibid.*: 441-450)では、ヴェーダ、ダルマ・シャーストラ、戯曲と叙事詩、ガザルと歌(git)、物語や道德の書(パンチャ・タントラなど)について概説がなされる。ペルシア語やアラビア語への翻訳についても書かれている。補遺2「ムスリムの文学」(*Ibid.*: 451-456)では、インドにおけるペルシア文学について述べた後、フィリシュタ(Firishta, 1570?-1612)、アブル・ファズル(Abū al-Fazl, 1551-1602)、ファイズイー(Faizī, 1547-1595)イブン・バットウータ(Ibn Battūṭa, 1304-68/69)、ハーフィー・ハーン(Khāfī Khān, 1664-1732)、そしてムスリムの歴史家たちと、インドのペルシア語詩人たちについて記して筆を置いている。

3.3 テクストの特徴

本書の第1章・第1節では、インドの自然地理学的な領域として、英領インドの勢力範囲を提示している。また、補論1は英領インドの行政区分の説明となっている。冒頭と補論でインドの範囲を提示することで、本論での叙述の中心が北インドのガンジス河流域であるにもかかわらず、それがインドの歴史として語られる。一方で、マハーラーシュトラのように北インドの読者になじみがないと判断された地については、その説明が特に加えられる。また、南インドで300年間存続したヴィジャヤナガル王国についての叙述の短さも注目に値する。明らかに北インド中心の歴史観が提示されている。

時間的な特徴としては、西暦を一貫して使っており、植民地の時空間を前提に書かれたテキストであることは明らかである。また、時代区分についても、1章をヒンドゥー時代、2・3章をムスリム時代、5章以降をイギリス時代としており、ミルの『英領インド史』(Mill 1817)に代表される植民地的歴史区分が踏襲されているように見える。また、イギリス時代の総督を中心とした編年的な記述は、19世紀半ばにミルのテキストにウィルソンが加筆・編集した『英領インド史』(Mill and Wilson 1848)における記述様式と類似している。一方で、イクバルとプラシャードは、イギリス統治時代をクライヴの時代とそれ以降で分けている。また、マラータの歴史に特に一章を割く構成は、W.W.ハンターの『インドの諸民族概略史』(初版 1880)にも見られるものだが[Hunter 1893: 90-93]、イクバルとプラシャードは分量面でも内容面でもこの章により重要な位置づけを与えている。

インド社会の住民については、明確に宗派集団で区別している。ヒンドゥーの古代、ムスリムの中世、イギリスの近代と区分するだけでなく、イスラームを明確に「外来」のものとして位置づけている。現実の南アジアにおけるイスラームの信仰は、スーフィー聖者の影響などを通じて緩やかに広まっていったと考えられるが、本書ではイスラームの信仰

の広まりを明確にイスラーム諸王朝の「侵入」と関連づけて説明している。また、ふたつの補遺では、ヒンドゥーとムスリムの文学を明確に分けている。特に、「ムスリムの文学」については、その系譜をペルシアとアラブに求めており、インドの外部との結びつきを強調している。

4. おわりに

イクバルとプラシャードの『インド史』は、教科書委員会の検定という制約条件の下で親英的な基調で書かれ、時代区分や社会観においても植民地の歴史認識の派生ともいえる叙述がなされている。イギリス統治時代の中の時期区分をクライヴ期とその後に置くことで、明らかに大事件であったはずの1857年大反乱をひとつの逸話として無害化するように読める。反乱者たちはイギリスによる健全な統治を妨害した、悪党や犯罪者として矮小化して描かれている。この叙述は、同時期にサーヴァルカルが匿名で出した『1857年のインド独立戦争』([Savarkar] 1909)とは対照的である。『インド史』では、親英の姿勢を示すために有用な過去として、大反乱を扱っていることが際立っている。

一方で、マラータの歴史に一章を割く構成は、ムガル期のムスリム王朝の過去に対して、ヒンドゥー王朝の過去を対比させる仕掛けとして機能している。19世紀末より、ティラクに代表されるヒンドゥーの政治指導者たちが、シヴァージーを象徴として強く打ち出すようになっていたが、この新しく強調されるようになった物語が『インド史』でも語りなおされていると見るべきであろう。この新たな「ヒンドゥーの過去」は、イスラーム共同体の歴史と対比させることができる、他者の歴史として有用だったのだと理解できる。『インド史』が用意された時期は、まさにイクバルが領域的ナショナリズムから脱領域的なイスラーム共同体を指向する思想を鍛えていた時期なのであった。

最後に、今後の研究の可能性として、植民地国家とポスト植民地国家の教材における歴史叙述を通時的に比較検討することができるだろう。カースミーによってパーキスターンの歴史教科書についての先駆的な研究がなされているが、個別教材の詳細な検討はいまだ課題である。現代の南アジアの教科書に表れる歴史表象については、栗屋 (2004)、内藤 (2004)、澤田 (2012)、須永 (2013) などの研究がある。これらの研究と植民地期以来の教材における歴史叙述の変化についての今後の研究を接続することで、教育という文脈における歴史表象の変化の経路が解明できるだろう。そのとき、イクバルとプラシャードの『インド史』についても、その歴史的な位置づけがより明確になるはずである。

注

- 1) 本書の原本はラーホールのイクバル・アカデミーに所蔵されているが、そのオンライン・ライブラリでデジタル画像が閲覧可能である。ただし、複写されていないページが数カ所あったため、

- 大阪大学言語文化研究科のDr. Marghoob Hussain Tahirにご尽力いただき、原本からの複写画像を入手できた。ここに心からの謝意を表したい。
- 2) こうした見方に対して、在地の歴史叙述の伝統を読み直す試みが、比較的近年になってさかんなされている。Bayly (1996)、Narayana Rao, Shulman and Subrahmanyam (2001)、Aquil and Chatterjee eds. (2008)などを参照。
 - 3) これに加えて、女性教育の促進も強調されていたことが重要である。ウッズの教育に関する通達については、Moore (1966: 108-123)を参照。
 - 4) ウルドゥー文学の中心地として、デリーおよびラクナウーと新興のラーホールとの間に競争関係があった(山根 2004)。文人たちのこうした競争関係には、安定的な収入源となりうる教材に関する権益も影響を与えていた可能性があるかもしれない。
 - 5) 初期イクバルのナショナリズム思想については松村 (1982, 1983)。同時期の論考「ムスリムの生活について」の松村訳も併せて参照(イクバル 1984)。
 - 6) イクバルの思想的変化については山根 (2019)。近代イスラーム復興運動運動の思想家マウドゥーディーとイクバルとの関係を考察した山根 (2003)も参照。
 - 7) ウルドゥー語教科書については、6年生 (Iqbāl o Shujā' 1929)、5年生 (Iqbāl o Shujā' 1937)、7年生 (Iqbāl o Shujā' n.d.)、8年生 (Iqbāl o Shujā' 1940)を確認できた。カレッジ入試用のペルシャ語教材 (Iqbāl 1927) は、少なくとも1934年に再版されている (Iqbāl 1934)。当時のパンジャーブでは、幅広い年齢層の生徒と学生が教材の執筆者としてイクバルに触れ、長じて彼の詩や哲学に出会うという経験をしたことになろう。イクバルの執筆した教科書についてはHāshmi (1982: 424-439)。
 - 8) イクバルは、1916/17年度から死去する1938年までのあいだに、弁護士業収入で1,00,274ルピー、本の執筆収入で62,967ルピー、試験関係の仕事を含む大学関係の収入で34,731ルピーを得ていた (Mahmūd 1987: 186)。
 - 9) 彼の息子ジャーヴェード・イクバルによる伝記『生き生きした流れ』から、イクバルのラーホールでの学生生活に関する箇所を山根 (2020) が訳出している。
 - 10) 残念ながら、筆者が参照したイクバル・アカデミー所蔵の原本では、ジャハーンギールについて記述されている132-133ページが失なわれていた。本節の第1項の内容はおそらくはジャハーンギール自身についての記述で、第2項はヌール・ジャハーンについての記述であろうと思われる。

参考文献

ウルドゥー語の文献

Hāshmi, Rafī' al-Dīn

1982 *Tasānif-e Iqbāl Kā Tahqīqī o Tauzīhī Muṭāla'ah*, Iqbāl Akādmī Pākistān, Lāhor.

2004 *Iqbāliyat: Tafhīm o Tajzia*, Iqbāl Akādmī Pākistān, Lāhor.

Iqbāl, Muḥammad

1927 *Ā'ina'-e 'Ajam ya 'nī Intekhābāt-e Nathr o Naẓm-e Fārsī barā'e Tulabā-e Meṭrikveshan*, 'Aṭar Cand Kapūr eṇḍ Sanz, Lāhor.

1934 *Ā'ina'-e 'Ajam ya 'nī Intekhābāt-e Nathr o Naẓm-e Fārsī barā'e Tulabā-e Meṭrikveshan*, 'Aṭar Cand Kapūr eṇḍ Sanz, Lāhor.

Iqbāl, Muḥammad o Lālah Rām Prashād

1913 *Tārīkh-e Hind*, Munshī Gulāb Singh ēṇḍ Sanz, Lāhor.

Iqbāl, Muḥammad o Aḥmad Shujā‘

1929 *Urdū Kors: Chaṭī jamā‘at ke li‘e*, Glāb Cand Kapūr ēṇḍ Sanz, Lāhor.

1937 *Urdū Kors: Pāncvīṇ jamā‘at ke li‘e*, Glāb Cand Kapūr ēṇḍ Sanz, Lāhor.

1940 *Urdū Kors: Āṭhvīṇ jamā‘at ke li‘e*, Glāb Cand Kapūr ēṇḍ Sanz, Lāhor.

n.d. *Urdū Kors: 7th Class*, Glāb Cand Kapūr ēṇḍ Sanz, Lāhor.

Maḥmūd, Ṣafdar

1987 *Dard-e āgahī*, Sang-e Mīr Pablikeshanz, Lāhor.

その他言語の文献

Aquil, Raziuddin, and Partha Chatterjee

2008 *History in the Vernacular*, Permanent Black, Ranikhet.

栗屋 利江

2004 「インドにおける歴史教科書論争をめぐって」、『歴史と地理』574、1-16。

Bayly, C. A.

1996 *Empire and Information: Intelligence Gathering and Social Communication in India, 1780-1870*, Cambridge University Press, Cambridge; New York.

Guha, Ranajit

1988 *An Indian Historiography of India: A Nineteenth-Century Agenda and its Implications*, K.P. Bagchi & Co, Calcutta.

Hunter, William Wilson

1893 *A Brief History of the Indian Peoples*, Clarendon Press, Oxford.

井坂 理穂

2019 「植民地インドの社会と文化」、長崎暢子編『世界歴史大系 南アジア史4：近代・現代』、山川出版社、74-100ページ。

イクバル、ジャーヴェード（山根聡訳）

2020 「詩人ムハンマド・イクバルのラーホールでの学生時代」、『印度民俗研究』別巻6、8-18。

イクバル、ムハンマド（松村耕光訳）

1984 「イクバル『ムスリムの生活について』」、『大阪外国語大学学報』67、147-60。

Khan, Javed Ali

2005 *Early Urdu Historiography*, Khuda Bakhsh Oriental Public Library, Patna.

松村 耕光

1982 「初期イクバルにおけるインド・ナショナリズム I」、『外国語・外国文学研究』6、36-48。

1983 「初期イクバルにおけるインド・ナショナリズム II」、『外国語・外国文学研究』7、118-30。

Mill, James

1817 *The History of British India*, Baldwin, Cradock and Joy, London.

植民地インドの教科書における過去の表象:ムハンマド・イクバル&ラーラー・ラーム・ブラシャード『インド史』(1913年)を読む(宮本 隆史)

Mill, James and H. H. Wilson

1848 *The History of British India* (4th ed.), James Madden, London.

Moore, R. J.

1966 *Sir Charles Wood's Indian Policy, 1853-66*, The University Press, Manchester.

内藤 雅雄

2004 「インドにおける歴史研究と歴史教育—インド人民党支配下での歴史教科書問題」、『専修史学』37、1-27。

Narayana Rao, Velcheru, David Shulman and Sanjay Subrahmanyam

2001 *Textures of Time: Writing History in South India 1600-1800*, Permanent Black, Delhi.

Qasmi, Ali Usman

2016 “Textbooks for History and Urdu in Punjab: Transiting from the Colonial to the Post-Colonial Period”, *South Asia Chronicle* 6, 229-55.

Report on the Progress of Education in the Punjab

1912 *During the quinquennium ending 1911-12*, The Punjab Government Press, Lahore.

澤田 彰宏

2012 「歴史教科書にみるインドのセキュラリズム」、『大正大学大学院研究論集』36、144-136。

[Savarkar, Vinayak Damodar]

1909 *The Indian War of Independence of 1857*, s.n.

須永 恵美子

2013 「イスラーム国家としてのパキスタンにおける歴史言説—ウルドゥー語教科書の分析から」、『アジア・アフリカ地域研究』12(2)、157-91。

Viswanathan, Gauri

1989 *Masks of Conquest: Literary Study and British Rule in India*, Columbia University Press, New York.

山根 聡

2003 「南アジア・イスラームの地平—イクバルとマウドゥーディー」、小松久男・小杉泰編『現代イスラーム思想と政治運動』、東京大学出版会、85-116。

2004 「国語ウルドゥー語とその文学の評価を巡る地域差」、黒崎卓・子島進・山根聡編『現代パキスタン分析: 民族・国民・国家』岩波書店、121-148。

2019 「イクバルのロンドン」、小松久男編『1905年: 革命のうねりと連帯の夢』、山川出版社、146-201。